

## 新勅撰集と本歌取り

西 畑 実

## はじめに

本歌取りは、いうまでもなく、古歌の一句もしくは数句を取り用いることによって、一首の歌の内容を複雑化せんとする修辭法で、『新古今集』時代にもっとも盛んに行なわれたといわれている。藤原定家は本歌取りの先驅的役割をつとめたと見られるが、彼が晩年に撰んだ『新勅撰集』にも、——その影響下にあった人々の歌が多く集められているから——本歌取りの歌がかなり収められている。以下この小論において、『新勅撰集』の本歌取りを調査することにより、それが、『新古今集』と『新勅撰集』との歌風の違いとどのように関わっているかを述べてみたいと思う。

## 1

『新勅撰集』には本歌取りの歌が百七十五首ほどある。総歌数（岩波文庫本に従えば、千三百七十四首）に対する百分比を求めると、約十二・七パーセントとなる。本歌取りの歌が非常に多い

といわれる『新古今集』ですら、約十三・六パーセント（小島吉雄博士著『新古今和歌集の研究』）にとどまっていることを想起するとき、『新勅撰集』における比率は注目に値しよう。まず、『新勅撰集』に見える本歌取りの歌の内訳について述べてみよう。

出典	本歌取りの歌	出典	本歌取りの歌
万葉集	一九	新古今集	七
古今集	九〇	古今和歌六帖	一
後撰集	一一	伊勢物語	八
拾遺集	一八	源氏物語	二
後拾遺集	三	和漢朗詠集	一
金葉集	一	催馬楽	二
詞花集	二		三

本歌取りの歌の数よりも本歌の数の方が少ないのは、同じ歌を本歌に取っている場合があるからであり、また、本歌取りの歌の中には、二首を取り合せて詠んだものもあるので、総数はこの表における総計よりも減少する。

次に、誰の歌が多く本歌に取られているかという点、次のとおりである。

読人しらず六十一首、在原業平十首（うち一首二回本歌）、紀貫之八首、壬生忠岑六首（うち一首三回本歌）、素性法師六首（うち一首二回本歌）、小野小町四首（うち二首各二回本歌）、伊勢四首（うち一首二回本歌）、僧正遍昭三首（うち二首各二回本歌）、凡河内躬恒・曾禰好忠各三首、和泉式部二首（うち一首三回本歌）、柿本人麿・大伴家持・菅原道真・源宗子・紀友則各二首（以下省略）

さらに、いかなる歌が二回以上本歌になっているかを調べてみると、左のごとくである。（括弧内の数字は、『新勅撰集』における本歌取りの回数を示す）

- (三) ありあけのつれなくみえし別れよりあかつきばかりうき物はなし（『古今集』 壬生忠岑）
- (三) むばたまのやみのうつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり（『古今集』 読人しらず）
- (三) 世の中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる（『古今集』 読人しらず）
- (三) もろともに昔の下には朽ちずしてうつもれぬ名をみるぞ

かなしき（『金葉集』 和泉式部）

(二) 朝なきな草の上白く置く露の消なば共にといひし君はも（『万葉集』 作者未詳）

(二) 白たへの袖の別れは惜しけども思ひ乱れてゆるしつるかも（『万葉集』 作者未詳）

(二) 花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに（『古今集』 小野小町）

(二) かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせん（『古今集』 読人しらず）

(二) 今こんといひしばかりに長月のありあけの月をまらいでつる哉（『古今集』 素性法師）

(二) いろみえでうつるふものは世の中の人の心の花にぞありける（『古今集』 小野小町）

(二) あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかも世をばうらみじ（『古今集』 藤原直子）

(二) あまつかぜ雲のかよひ吹きとちよをとめのすがたしはしとどめん（『古今集』 僧正遍昭）

(二) おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの（『古今集』 在原業平）

(二) たがみそぎゆふつけどりか唐衣たつたのやまにをりはへてなく（『古今集』 読人しらず）

(二) きみをおきてあだし心をわがもたばすゑのまつ山浪もこえなん（『古今集』 東歌）

(二) おもひがはたえずながるるみづのあわのうたかたひとに  
あはできえめや『後撰集』 伊勢

(二) 唐錦枝にひとむらのこれは秋のかたみをたたぬなりけり  
『拾遺集』 僧正遍昭

(二) 忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふ  
まで『拾遺集』 橘忠馨

(二) むねはふじ袖は清見が関なれや烟も波もたたぬ日ぞなき  
『詞花集』 平祐挙

## 2

右の本歌取りの調査表を、『新古今集』のそれと比較してみると  
にしよう。

小島吉雄博士の御調査に従えば、『新古今集』において頻繁に本  
歌に取られているのは、(括弧内の数字は本歌取りの回数である)

(十) 五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする  
『古今集』 読人しらず

(七) 月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの  
身にして『古今集』 在原業平

(六) さむしろに衣かたしき今宵もや我をまつらむ宇治の橋姫  
『古今集』 読人しらず

(五) 忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふ  
まで

(四) 今こんといひしばかりに長月のありあけの月をまちいで  
つる哉

(三) 木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり  
『古今集』 読人しらず

(三) 世の中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふ  
はせになる

(三) きみをおきてあだし心をわがもたばすゑのまつ山浪もこ  
えなん

(三) わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉立てる  
門『古今集』 読人しらず

というのであるが、『新勅撰集』には、「五月まつ」、「さむしろ  
に」、「木の間より」、「わが庵は」の歌を本歌とするものが一首も  
見当らず、「月やあらぬ」の歌が一回、「忘るなよ」、「今こんと」、「  
きみをおきて」の歌が二回本歌に取られているに過ぎない。

また、「新古今歌人は、在原業平の歌が一番好きであったという  
ことが出来る」と説かれているように、新勅撰歌人も、業平の歌に  
もっとも親炙しているが、本歌になっている業平の歌を検討してみ  
ると、「月やあらぬ」の歌のごとき「綿々たる懐旧の情に溢れた感傷  
的な、そしてさまざま連想を誘起せしむべき歌」もあるけれども、  
ちはやぶる神世もきかずたつたがはから紅に水くくるとは『古  
今集』

という歌のような智巧的な歌が多数を占めている。

次に、新古今歌人は、業平については、柿本人麿の歌を愛好して  
いるが、新勅撰歌人は、時代の新しい紀貫之の歌を時代の古い在原  
業平に匹敵するほど好んでいたことがいえる。貫之の特質はもとよ

り主知的な歌風にある。しかも、彼の歌を好んで取っているのはほとんど当代の作者である。

さらに、新勅撰歌人は、『古今集』の誹諧歌をも本歌にしている。誹諧歌は表現のおかしみ、内容の滑稽を主眼とするものだから、いうまでもなく機智的な歌である。これらは本歌の有する情趣よりも、むしろ修辭的興味に引かれて利用されたものであって、このような取り方は、新古今歌人にあまり見られないところであった。

これについて注意を惹くのは、『新勅撰集』における物語からの本歌取りの歌が、『新古今集』に比して、はるかに少ないということである。そのうえ、物語の歌にもとづく作品ですら、たとえば、

うしとおもふものからぬるそでのうらひだりみぎにもなみや  
たつらん（藤原道家）

のように、『源氏物語』須磨の巻の、

うしとのみひとへに物は思はえでひだりみぎにもぬる袖かな  
に抛りながら、——本歌そのものも機智的要素を多分に含んでいるが——智巧的な歌になっているがごとくである。

こう見てくると、一般的に新勅撰歌人は、本歌取りにあたって、物語的情趣の漂う「詠嘆的な感傷歌」を志向していなかったのだということができる。これは、『新勅撰集』の歌風を特色づける要素として重要な意味を持つものと思われる。

## 3

では、本歌取りの歌が『新勅撰集』の歌風形成にいかに影響を及

ぼしているかについて考察してみたいと思う。

『新勅撰集』の夏の部には橘を素材にした歌が四首収められているけれども、

五月まつ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする

からの本歌取りの歌はない。ところが、『新古今集』においては、橘を主題とする歌の九首までがこの歌を本歌にしているのである。

したがって、『新古今集』の橘の歌のほとんどが「感傷的物語的情趣歌」となっている。『新勅撰集』の橘の歌が感傷的要素に乏しく、物語的情趣に欠けているのは、「五月まつ」の歌が一首の背景になっていないことに帰せられよう。『新勅撰集』における橘の歌の特色は、『樟蔭国文学』第九号所載拙稿「新勅撰集四季部の題について」に記しておいた。かように、同一の素材を取り上げた場合でも、作者がいかなる歌にもとづいて発想しているかによって、一首の風趣はすっかり異なったものになってしまうのである。今度は、梅の歌に視点を移すことにしよう。

『新古今集』には、

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身に  
して

というのを本歌もしくは背景とした歌が七首ほど見えるが、このうちの四首までが月下の梅香を詠じた感傷的な歌である。かような梅の歌は『新古今集』以前の勅撰集には存在しない。これがこの集の歌風の特長性を示すものであることは、小島吉雄博士が『新古今和歌集の研究 統篇』において詳細に述べておられるところである。



一方、『新勅撰集』から月光に梅香を配した歌を数え出してみると、すべて六首ある。そのうち本歌取りの歌は二首あって、

むめがかも身にしむころはむかしにて人こそあらねはるの夜のつき（藤原俊成）

むめがかもあまぎる月にまがへつつそれとも見えずかすむころかな（藤原定家）

前者は「月やあらぬ」の歌を、後者は『古今集』の詠人しらずの歌、

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれればを本にしている。

俊成の作は、業平の歌を本歌としていただけに懐旧的情緒は帯びているが、『新古今集』の梅の歌に見出されるとき幻想的で物語的情趣の漂う妖艶美の風体には遠い。また、道家のは、古雅な歌を本歌としながら智巧な作品となっており、よく整正の美を保っているが、情緒的潤いには乏しい。

もっとも、『新勅撰集』にも、

ありあけの月はなみだにくもれども見し世に似たるむめのかぞする（下野）

のごとき、月下の梅の香氣に対して懐旧の涙に潤う心情を吐露したあわれ深い作品もあるが、これとても小説的連想を伴うとまではいかないのである。

このように、『新古今集』の梅香の歌と『新勅撰集』のそれとの間には表現内容の点においてすこぶる逕庭があり、それは、いかな

る歌を本歌に取るか、ないしはいかに取り用いるかに係っているように思われる。

以上の考察を通じていえることは、新古今歌人に絶対的な人気があった「五月まつ」、「月やあらぬ」のような歌に、新勅撰歌人はもはや興味を寄せなくなっていたということである。

## 4

なお、述べておきたいことは、藤原定家が橘や梅を主題にしてどのような歌を詠じているかということである。『拾遺愚草』には橘の歌が二十四首ほどある。石田吉貞博士の区分（『藤原定家の研究』）に従えば、治承二年から建久七年に至る青壮年期の橘の歌は、鋭い才智の閃きを見せながらも、がいて『古今集』以来の趣向を出ておらず、感傷的要素に乏しいのが多い。新古今期（建久八年～元久元年）において、すなわち、建久九年の夏に詠進した仁和寺宮五十首をへて、正治二年院初度百首に至り、ここにはじめて「時間連続的事象を詠みこんだ」橘の歌が作り出されたのである。このような歌の中に、

たが袖をはなたちばなにゆづりけむ宿はいくよと音信もせで

（正治百首）

があるが、これは「五月まつ」の歌のほかに、同じく『古今集』の詠人しらずの、

あれにけりあはいいくよの宿なれや住みけむ人のおとづれもせぬ

の歌をも本歌としており、人生詠嘆的な感傷性の勝った歌になっている。

ところが、ようやく歌風に変化を示しはじめた建保期（建永元年（承久三年）に入ると、橘を詠じた作品は、新古今期のそれとは異なる様相を示すようになる。この期においても、橘の歌は「五月まつ」の歌にもとづいて詠まれているものの、一首の焦点が智巧的表現美に置かれ、そのために感傷的要素はどちらかといえば乏しくなっているような歌が大半を占めている。このような傾向は晩年に至るまでも変わっていない。関白左大臣家百首（貞永元年四月）の、袖の香の花にやどかれほととぎす今もこひしき昔とおもはばに見られるがごとくである。

では、梅の歌はどうかといえば、六十首ほどの作のうち、新古今歌風の中樞をなす月下の梅香を詠じた歌は八首（重奉和早卒百首・仁和寺宮五十首各一首、院初度百首二首、千五百番歌合・内大臣家百首・百番歌合・権大納言家三十首各一首）ある。ところが、「月やあらぬ」の歌が背景になっているのは、

梅の花にほひをうつす袖の上にのきもる月のかげぞあらそふ

『新古今集』 正治百首

われぞあらぬ驚きそふ花の香は今もむかしのはるのあけぼの

（建暦二年院二十首）

の二首しかない。「複雑な小説的情趣が一首のうちに盛られて」いる前者に対し、後者は理智的技巧が浮き上っていて、感傷的な情趣にはやや遠い観がある。つまり、月前の梅の匂いによって懐旧の心

が誘発され涙垂るの趣向は、「梅の花にほひをうつす」の歌にのみ見出せるもので、残余の梅の歌はすべて「われぞあらぬ」のような発想に赴いている。要するに、定家の梅の歌は新古今期のそれを除いて、橘の詠同様、感傷的要素をほとんど包含していないといえるのである。

# 5

上述のごとく、新勅撰歌人は「五月まつ」、「月やあらぬ」の歌に対して冷淡であったが、定家もたいして愛好していなかったらしいことは、これらを本歌に取ることが比較的少ないことによって知ることができよう。彼が好んで本歌にしている歌は、

みちのくのしのぶもぢずりたれゆゑに乱れむと思ふわれならな

くに『古今集』 源融

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせし  
まに

のような智巧美の歌である。また、新勅撰歌人が多く取っている「ありあけの」、「今こんと」なども同傾向の歌である。これらの歌は『近代秀歌』（自筆本）や『秀歌体大略』などにも掲げられているから、定家の愛唱するところであつたろうと思われる。かくて、定家の好みは智巧的な構成歌にあって、感傷的な抒情歌になかったらしいことになる。それは彼の理智的な資性から来しているのであろう。そういう好尚にまかせて、彼は『新勅撰集』に、どちらかといえば感傷的要素に乏しい歌を本歌にしている作品を採録

したと考えられる。それもこの集の歌風を『新古今集』と大いに異ならしめている要素の一つに数えることができるであろう。

## 本歌取り一覽

### 万葉集

白波の浜松が枝の手向ぐき幾代までにか年の経ぬらむ (川島皇子)  
みくまのうらわのまつたむけぐさいくよかけきぬなみのしらゆふ (七条院大納言)

采女の袖吹きかへす明日香風都を遠みいたづらに吹く (志貴皇子)

あすかがはかはせのきりもはれやらでいたづらにふく秋のゆふかぜ (真昭法師)

天ぎかる夷の長道ゆ窓ひ来れば明石の門より大和島見ゆ (柿本人麿)

ゆふなぎにあかしのとより見たせばやまとしまねをいつる月

かげ (内大臣)

何処にかわれば宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば (高市黒人)

くればまたわがやどりかはたび人のかちのはらのはぎのした

つゆ (前内大臣)

阿部の鳥鵜の住む磯に寄する波間なくこのころ大和し思ほゆ (山部赤人)

いはのうへになみこすあべのしまつどりうきなにぬれてこひつ

つぞふる (正三位家隆)

隠口の泊瀬の山の山のまにいきよふ雲は妹にかもあらむ (柿本人麿)

あきといへばものをぞおもふやまのはにいきよふくものゆふぐれのそら (式子内親王)

…淡路島 松帆の浦の 朝なぎに 玉藻刈りつつ 夕なぎに 藻塩やきつつ… (笠金村)

こぬひとをまつほのうらのゆふなぎにやくやもしほの身もこがれつつ (権中納言定家)

山の端にいきよふ月のいでむかとわが待つ君が夜は降ちつつ (忌部黒麿)

あまをぶねはつかの月のやまのはにいきよふまでも見えぬきみかな (正三位家隆)

かはづ鳴く甘南備河にかけ見えて今か咲くらむ山吹の花 (厚見王)

かはづなく神なびがはにさくはなのいはぬ色をも人のとへかし (二条院讃岐)

秋の野を朝行く鹿の跡もなく思ひし君にあへる今夜か (賀茂女王)

わがやどはかつちるやまのもみち葉にあさゆくしかのあとだにもなし (僧正行意)

落ちたぎち流るる水の磐に触れよどめる淀に月の影見ゆ (作者未詳)

おちたぎつはやせのかはもいはふれてしばしはよどむなみだとも哉 (権中納言長方)

道のべの草を冬野にふみ枯らし吾立ち待つと妹に告げこそ (作者未詳)

あふまでとくさをふゆのにふみからしゆききのみちのはてをしらばや (入道前太政大臣)

み吉野の水隈が菅を編まなく刈りのみ刈りて乱りなむとや (作者未詳)

みよしののみくまがすがをかりにだに見ぬものからやおもひみだれん (参議雅経)

朝な草の上白く置く露の消なば共にといひし君はも (作者未詳)

めのまへにかはるころをしらつゆのきえばともになにおもひけん (二条院讃岐)

わするなよきえばともといひおきしすゑののくさにむすぶしらつゆ (入道前太政大臣)

白たへの袖の別れは惜しけども思ひ乱れてゆるしつるかも (作者未詳)

つらかりしそでのわかれのそれならでをしむをいそぐとしのくれ哉 (正三位家隆)

きぬぎぬのつらきわかれにたれなりてそでのわかれをゆるしそめけむ (源家長)

月日も (新勅撰集) 月日はかはり行けども久にふる三諸の山のとつみやどころ (作者未詳)

くれやすきひかずもゆきもひさにふるみむろのやまのまつし

たをれ (前関白)

安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに (作者未詳)

いにしへの我とはしらすあさかやま見えしやまのかげにしあらねば (蓮生法師)

堀江には玉敷かましを大君を御船こがむとかねて知りせば (橘諸兄)

名にしおはばしくやみぎはのたま柳いりえのなみにみふねこごまで (入道前太政大臣)

始春の初子の今日の玉箒手に執るからにゆらく玉の緒 (大伴家持)

手にとりてゆらぐたまのをたえざりし人ばかりだにあひみてし

古今集

なにはづにさくやこのはな冬ごもりいまははるべとさくやこの花 (玉仁)

なにはづにさくやむかしのむめの花いまもはるなるうらかぜぞふく (後京極摂政前太政大臣)

ときはなる松のみどりも春くれば今ひとしほの色まさりけり (源宗子)

ときはなるたままつがえも春くれば千世のひかりやみがさそふらん (前左大臣)

ももちどりさへづる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく (詠



人しらず)

みよしののやまのはかすむはるごとに身はあらたまのとしぞふ  
りゆく(権大納言家良)

山ざくらわがみにくればはるがすみ峯にもをにも立ちかくしつづ  
(読人しらず)

やまざくらみねにもをにもうゑおかん見ぬよのはるを人やしの  
ぶと(入道前太政大臣)

みわたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける(素性法師)  
たかきこのをのへのさくらたづぬればみやこのにしきいくへか  
すみぬ(式子内親王)

この里にたびねしぬべし桜花ちりのまがひにいへちわすれて(読人  
しらず)

かへるさのみちこそしらねさくらばなちりのまよひにけふはく  
らしつ(大納言定通)

花ちらす風のやどりはたれかしの我にをしへよ行きてうらみむ(素  
性法師)

うらむべき方こそなければはるかぜのやどりさだめぬはなのふる  
さと(入道前太政大臣)

桜花とくちりぬともおもほえず人の心ぞ風もふきあへぬ(紀貫之)  
めのまへにかぜもふきあへずうつりゆくころのはなもいろは  
見えけり(前関白)

春風は花のあたりをよぎてふけ心づからやうつろふとみん(藤原好  
風)

たちまよよしののさくらよぎてふけくもにまたるはるのや  
まかぜ(関白左大臣)

春ごとに花のさかりはありなめどあひみん事はいのちなりけり(読  
人しらず)

いのちありてあひ見むこともさだめなくおもひしはるになりに  
けるかな(殷富門院大輔)

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに  
(小野小町)

はるの夜の月もありあけになりにけりうつろふはなにながめせ  
しまに(参議雅経)

いたづらによそぢのさかはこえにけりみやこもしらぬながめせ  
しまに(僧正行意)

けさきなきいまだたびなる郭公花たちばなにやどはからなん(読人  
しらず)

ほととぎすこそやどかりしふるさとはなたちばなにき月す  
るな(正三位家隆)

天河もみちをはしにわたせばやたなばたつめの秋をしもまつ(読人  
しらず)

あまのがはわたらぬさきのあきかぜにもみちのはしのなかやた  
えなん(法印猷円)

物ごとに秋ぞかなしきもみちつつうつろひゆくをかぎりとおもへば  
(読人しらず)

あきのいろのうつろひゆくをかぎりとしてそでにしぐれのふらぬ

風

ひはなし（入道前太政大臣）

月みればちにものこそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど  
（大江千里）

月の色もさえゆくそらの秋かぜにわが身ひとつと衣うつなり

（承明門院小宰相）

久方の月の桂も秋は猶もみちすればやてりまさるらむ（壬生忠岑）

見るまにいろいろかはりゆくひきかたの月のかつらの秋のみち

葉（藤原資季）

なきわたるかりの涙やおちつらん物思ふやどのはぎのうへの露（説人しらず）

萩のうへのかりのなみだをかこつともこひにいろこきそでやみ

ゆらん（入道前太政大臣）

月草に衣はすらむあき露にぬれてのちはうつろひぬとも（説人しらず）

おもかげは猶ありあけの月くきにぬれてうつろふそでのあきつ

ゆ（藤原教雅）

きとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる

（僧正遍昭）

ぬしはあれど野となりにけるまがき哉をがやがしたにうつらな

くなり（前大僧正慈円）

秋風のふきあげにたてゐるしらぎくは花かあらぬか浪のよするか（菅

原道真）

時しあればさくらとぞおもふはるかぜのふきあげのはまにたて

るしら雲（正三位家隆）

心あてにをらばやをらんはつしものおきまどはせるしらぎくの花  
（凡河内躬恒）

月かげにいろいろわかれぬしらぎくはこころあてにぞをるべかり

ける（右兵衛督公行）

龍田河紅葉乱れてながるめりわたらば錦中やたえなむ（説人しらず）

あまのがはわたらぬさきのあきかぜにもみぢのはしのなかやた

えなん（法印猷円）

ちはやぶる神世もきかずたつたがはから紅に水くくるとは（在原業

平）

あきはけふくねなるくるたつた河ゆくせのなみもいろかはる

らん（参議雅経）

山ざとは冬ぞさびしきまきりける人めも草もかれぬとおもへば（源

宗子）

霜おかぬ人めもいまはかれはててまつにとひくるかぜぞかはら

ぬ（大蔵卿有家）

みよしのの山のしらゆきふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

（壬生忠岑）

いるひとのおとづれもせぬしらゆきのふかきやまぢをいづる月

かげ（前関白）

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば（説人し

らず）

むめがかもあまぎる月にまがへつつそれとも見えずかすむころ  
かな (前関白)

昨日といひけふとくらしてあすかがは流れてはやき月日なりけり  
(春道列樹)

とどめばやながれてはやきとしなみのよどまぬ水はしがらみも  
なし (入道二品親王道助)

わたつうみのはまのまさごをかぞへつつ君がちとせのありかずにせ  
ん (読人しらす)

あきをへてきみがよはひのありかずにかり田のいねもちづかつ  
むなり (入道前太政大臣)

さくら花ちりかひくもれおいらくのこむといふなるみちまがふがに  
(在原業平)

もみちばのちりかひくもるゆふしぐれいづれかみちとあきのゆ  
くらん (源有長)

ふしておもひおきてかぞふる万代は神ぞしるらんわがきみのため  
(素性法師)

ふしておもひあふぎていのるわがきみのみ世はちとせにかぎら  
ざるべし (権大僧都良算)

いのちだに心になふ物ならばなにかわかれのかなしからまし (し  
ろめ)

めぐりあはむわがかねごとのいのちだに心になふはるのくれ  
かは (侍従具定母)

あまの原ふりさけみればかすがなるみかきの山にいでし月かも (安

部仲麿)

いづこにもふりさけいまやみかきやまもろこしかけていづる月  
かげ (源家長)

わたの原やそしまかけてこぎいでぬと人にはつげよあまのつり舟  
(小野篁)

わたのはらやそしましろうくるゆきのあまぎるなみにまがふつ  
りふね (正三位家隆)

名にしおはばいざこととはむ宮こどりわが思ふ人は有りやなしやと  
(在原業平)

わがおもふ人に見せばやもろともにすみだがはらのゆふぐれの  
そら (皇太后宮大夫俊成)

このたびはぬきもとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに (菅原  
道真)

たむけやまもみちのにしきぬきはあれど猶月かげのかくるしら  
ゆふ (正三位家隆)

かたいとをこなたかなたによりかけてあはずはなにをたまのをにせ  
ん (読人しらす)

たがために人のかたいとよりかけてわがたまのをのたえむとす  
らん (正三位家隆)

かたいとのあはずはさてやたえなましちぎりぞ人のながきたま  
のを (下野)

わが恋を人しるらめやしきたへの枕のみこそしらばしるらめ (読人  
しらす)

あまの原ふりさけみればかすがなるみかさの山にいでし月かも（安

しらす）

わがこひはなみだをそでにせきとめてまぐらのほかはしる人も  
なし（関白左大臣）

たねしあればいはにもまつはおひにけり恋をしこひばあはざらめや  
も（読人しらす）

身をすててこひぬころぞうかりけるいはにもおふるまつはあ  
るよに（八条院高倉）

よひよひに枕さだめん方もなしにねしよかゆめにみえけん（読  
人しらす）

うちなげきいかにねし夜かとおもへどもゆめにも見えてころも  
へにけり（大納言実家）

おきへにもよらぬたまもの浪のうへにみだれてのみや恋ひわたりな  
ん（読人しらす）

いはみがたひとのころはおもふにもよらぬたまものみだれか  
ねつつ（入道前太政大臣）

秋風の身にさむければつれもなき人をぞたのむくるる夜ごとに（素  
性法師）

わがこころやみのうつつはかひもなしゆめをぞたのむくるる夜  
ごとに（権大納言忠信）

恋ひわびてうちぬるなかに行きかよふ夢のただちはうつつならなむ  
（藤原敏行）

見るとなきやみのうつつにあくがれてうちぬるなかのゆめやた  
えなん（前関白）

ゆふされば蜚よりけにもゆれどもひかりみねばや人のつれなき（紀

友則）

さみだれのそらにもつきはゆくものをひかり見ねばやしる人の  
なき（藤原光俊）

としをへてきえぬおもひはありながらよるの袂は猶こほりけり（紀  
友則）

わするなよあさまのたけのけぶりにもとしへてきえぬおもひあ  
りとは（源有教）

白玉とみえし涙もとしふればからくれなゐにうつろひにけり（紀貫  
之）

しらたまはからくれなゐにうつろひぬこずゑもしらぬそでのし  
ぐれに（内大臣）

秋ののにきさわけしあきの袖よりもあはでこしよぞひちまきりける  
（在原業平）

あひ見てもかへるあしたのつゆけさはさきわけしそでにおとり  
しもせじ（大宰大貳重家）

ありあけのつれなくみえし別れよりあかつきばかりうき物はなし  
（壬生忠岑）

あかつきぞなほうきものとしられにしみやこをいでしありあけ  
のそら（藤原兼高）

くれにもといはぬわかれのあかつきをつれなくいでしたびのそ  
らかな（藤原信実）

あかつきとうらみし人はかれはてうたてしぐるるあさぢふの  
やど（権大納言忠信）



かきくらす心のやみにまどひにきゆめうつつとは世人さだめよ（在原業平）

うつつともゆめともたれかさだむべき世ひともしらぬけきのわかれは（権大納言実国）

むばたまのやみのうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり（説人しらず）

見るとなきやみのうつつにあくがれてうちぬるなかのゆめやたえなん（前関白）

わがころやみのうつつはかひもなしゆめをぞたのむくるる夜ごとに（権大納言忠信）

さりとともたのむもかなしむばたまのやみのうつつのちぎりばかりは（藤原永光）

君がなもわが名もたてじなにはなるみつともいふなあひきともいはじ（説人しらず）

つのくにのみつとないひそやましろのとはぬつらさは身にあまるとも（宮内卿）

枕より又しる人もなきこひをなみだせきあへずもらしつる哉（平貞文）

わがこひはなみだをそでにせきとめてまぐらのほかはしる人もなし（関白左大臣）

風ふけば浪打つ岸のまつなれやねにあらはれてなきぬべらなり（説人しらず）

まつがねをいそべのなみのうつたへにあらはれぬべきそでのう

すまのあまのしほやき衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ

へ哉（権中納言定家）

今こんといひしばかりに長月のありあけの月をまちいでつる哉（素性法師）

いまこむとたのめし人やいかならん月になくころもうつなり（前大納言隆房）

こぬひとをなにかこたむやまのはの月はまちいでてき夜ふけにけり（藤原隆信）

つのくにのなにはおもはず山しろのとはにあひみんことをのみこそ（説人しらず）

つのくにのみつとないひそやましろのとはぬつらさは身にあまるとも（宮内卿）

しきしまのやまとはあらぬから衣ころもへずしてあふよしも哉（紀貫之）

あしびきのやまとはあらぬ唐錦たつたのしぐれいかでそむらん（参議雅経）

あまのすむきとのしるべにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん（小野小町）

こきかへるそでのみなとのあまをぶねきとのしるべをたれかをしへし（源家長）

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして（在原業平）

むめがかも身にしむころはむかしにて人こそあらねはるの夜の月（皇太后宮大夫俊成）

まかぜ（正三位家隆）

まつがねをいそべのなみのうつたへにあらはれぬべきそでのう

月（皇太后宮大夫俊成）

すまのあまのしほやき衣をさをあらみまどほにあれや君がきまさぬ  
（読人しらす）

すまのあまのまどほの衣夜やきむきうらかぜながら月もたまら

ず（正三位家隆）

秋はてて（後撰集）  
今はとてわが身時雨にふりぬれば言のはさへにうつろひにけり（小  
野小町）  
（同）

かくてよにわが身しぐれはふりはてぬおいそのもりのいろもか  
はらで（源泰光）

いろみえでうつろふものは世の中の人の心の花にぞありける（小野  
小町）

月草のうつろふいろのふかければ人のころのはなぞしをるる

（中宮但馬）

めのまへにかぜもふきあへずうつりゆくころのはなもいろは

見えけり（前関白）

あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなめ世をばうらみじ

（藤原直子）

あらいそのたまものところにかりねしてわれからそでをぬらしつ

るかな（式子内親王）

ほしわびぬあまのかるもにしはたれてわれからぬるるそでのう

らなみ（侍従具定母）

わたつみのわが身こそ浪立ちかへりあまのすむてふうらみつるかな

（読人しらす）

ここからわが身こそなみうきしづみうらみてぞふるやへのし

ほかぜ（正三位家隆）

しぐれつつもみづるよりもこののは心の秋にあふぞわびしき（読  
人しらす）

とへかしなしぐるるそでのいろにいでてひとのころのあきに

なる身を（宮内卿）

秋風のふきとふきぬるむさしのはなべてくさばの色かはりけり（読  
人しらす）

をぎの葉にふきとふきぬるあきかぜのなみだきそはぬゆふぐれ

ぞなき（入道前太政大臣）

ぬるがうちにみるをのみやは夢といはんはかなきよをもうつつとは

みず（壬生忠岑）

うつつのみゆめとは見えておのづからぬるがうちにはなぐさめ

もなし（藤原親康）

せをせばふちとなりてもよどみけりわかれをとむるしがらみぞな

き（壬生忠岑）

とどめばやながれてはやくとしなみのよどまぬ水はしがらみも

なし（入道二品親王道助）

紫のひとととゆゑにむさし野の草はみながらあはれとぞみる（読人  
しらす）

むさしのはのけしきもしられけりかきねにめぐむくさのゆ

かりに（前大僧正慈円）

あまつかぜ雲のかよひち吹きとちよをとめのすがたしばしとどめん

（良岑宗貞）

あまつそらくものかよひちそれならぬをとめのすがたいつかま  
ち見む (八条院高倉)

あまつかせ水をわたるふゆの夜のをとめのそでをみがく月かけ  
(式子内親王)

おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおいとなるもの  
(在原業平)

身につもる老ともしらでながめこし月さへかげのかたぶきにけ  
る (法印慶忠)

はらひかねくもるもかなしそらの月つもればおいのあきのなみ  
だに (侍従具定母)

たれをかもしる人にせんたかさごのまつもむかしの友ならなくに  
(藤原興風)

つれなしとたれをかいむたかさごのまつもいとふもとしはへ  
にけり (参議雅経)

風ふけどところもさらぬ白雲はよをへておつる水にぞありける (凡  
河内躬恒)

しら雲のやへ山ざくらさきにけりところもさらぬはるのあけぼ  
の (入道前太政大臣)

さきそめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる (紀貫  
之)

うちはへて世は春ならしふくかぜもえだをならさぬあをやぎの  
いと (内大臣)

世の中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる

(読人しらず)

あすかがはかるふちせもあるものをせくかたしらぬ年のくれ  
哉 (如願法師)

あすかがはけふのふちせもいかならんさらぬわかれはまつほど  
もなし (八条院高倉)

さだめなきよにふるさとをゆく水のけふのふちせはあすかかは  
らん (行念法師)

白雲のたえずたなびく峯にだにすめばすみぬる世にこそありけれ  
(惟喬親王)

はるは花ふゆはゆきとしてしら雲のたえずたなびくみよしのや  
ま (入道前太政大臣)

世にふればうきこそまされみよしのいはのかけ道ふみならしてん  
(読人しらず)

はなゆゑにふみならすかなみよしののよしののやまのいはのか  
けみち (権中納言長方)

いかならんいはのなかにすまばかは世のうきことのきこえこざら  
む (読人しらず)

よのうきやきこえこざらむおもかげはいはほのなかにおくれし  
もせじ (前大納言忠良)

久方のなかにおひたるさとなればひかりをのみぞたのむべらなる  
(伊勢)

ひさかたのかつらにかくるあふひぐさそらのひかりにいくよな  
るらん (権中納言定家)

世の中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけふはせになる

るらん（権中納言定家）

野とならばうづらとなきて年はへんかりにだにやは君はこざらむ  
（詠人しらず）

ぬしはあれど野となりけるまがき哉をがやがしたにうづらな  
くなり（前大僧正慈円）

いざここにわが世はへなんすがはらやふしみのさとのあれまくもを  
し（詠人しらず）

ふるさとのあれまくたれかをしむらんわが世へぬべきはなの  
か（後京極摂政前太政大臣）

風ふけばおきつ白浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ（詠人  
しらず）

こえじただおなじかざしの名もつらしたつたのやまの夜半のし  
らなみ（法眼宗円）

たがみそぎゆふつけどりか唐衣たつたのやまにをりはへてなく（詠  
人しらず）

しろ妙のゆふつけ鳥もおもひわびなくやたつたの山のはつしも  
（正三位家隆）

たつたやまもみちのにしきをりはへてなくといふとりのしもの  
ゆふしで（行念法師）

山川のおとにのみきくももしきを身をはやながら見るよしもがな  
（伊勢）

おもひ河身をはやならみづのあわのきえてもあはむ浪のまも  
哉（正三位家隆）

あふことの まれなる色に おもひそめ わが身はつねに あまぐ

もの……（詠人しらず）

あふことはしのぶのころもあはれなどまれなるいろにみだれそ  
めけむ（権中納言定家）

むつ言もまだつきなくにあけぬめりいづらは秋のながしてふよは  
（凡河内躬恒）

むつごとくもまだつきなくのあきかぜにたなばたつめやそでぬら  
すらん（八条院高倉）

ふじのねのならぬおもひにもえばもえ神だにけたぬむなしけぶりを  
（紀乳母）

ふじのねのそらにやいまはまがへましわが身にけたぬむなしけ  
ぶりを（入道前太政大臣）

しもとゆふかづらきやまにふる雪のまなく時なくおもほゆる哉（大  
歌所御歌）

しもとゆふかづらきやまのいかならんみやこもゆきはまなく時  
なし（後京極摂政太政大臣）

しもやたびおけどかれせぬさかきばのたちさかゆべき神のきねかも  
（神あそびの歌）

しもやたびおけどみどりのさかきばにゆふしでかけて世をいの  
る哉（日吉忠成）

まきもくのあなしの山の山人とひとみるがに山かづらせよ（神あ  
そびの歌）

かけていのるそのかみやまの山びとひとみあれのもろかづ  
らせり（参議雅経）



みさぶらひみかさと申せ宮木のこの下露はあめにまされり(東歌)

みや木のこのしたふかきゆふつゆもなみだにまさるあきやなからん(平政村)

きみをおきてあだし心をわがもたばすゑのまつ山浪もこえなん(東歌)

いたづらにいくとしなみのこえぬらんだのめかおきしすゑのまつやま(源家長)

ふるさとのひに見せばやしらなみのきくよりこゆるすゑのまつ山(藤原清輔)

後 撰 集

うちはへてはるはさばかりのどけきをはなところやいそぐなるらん(清原深養父)

うちはへてふゆはさばかりながき夜に猶のこりけるありあけの月(二条院讃岐)

をしめどもはるのかぎりのけふのまたゆふぐれにさへなりにけるかな(読人しらす)

けふのみとをしむころもつきはてぬゆふぐれかぎるはるのわかれに(内大臣)

ゆくほたるくものうへまでいぬべくはあきかぜふくとかりにつげこそ(在原業平)

しらつゆのたまえのあしのよひよひにあきかぜちかくゆくほと

るかな(入道二品親王道助)

しらつゆにかぜのふきしくあきののはつらぬきとめぬたまぞちりける(文屋朝康)

むさしのやひとのころのあきつゆにつらぬきとめぬそでのしらたま(前関白)

おもひがはたえずなぐるみづのあわのうたかたひとにあはできえめや(伊勢)

ながれてのをさへしのぶおもひがはあはでもきえねせぜのうたかた(侍従具定母)

おもひ河身をはやながらみづのあわのきえてもあはむ浪のまも哉(正三位家隆)

ゆきやらぬゆめぢにまどふたもとはあまつそらなるつゆぞおきける(読人しらす)

いかにせんゆめぢにだにもゆきやらぬむなしきとこのたまくら

のそで(式子内親王)

これを見よ人もすさめぬ恋すとてねをなくむしのなれるすがたを(源重光)

いかにせんねをなくむしのからごろもひととがめぬそでのなみだを(従三位範宗)

あかつきのなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや(紀貫之)

あかつきのゆふつけどりもしらつゆのおきてかなしきためしにぞなく(中宮少将)

しらつゆのたまえのあしのよひよひにあきかせちかくゆくほた

伊勢の海のあまのまてがたいとまなみながらへにける身をぞうらむ  
る(源英明)

伊勢のうみのあまのまてがたまてしばしうらみになみのひまは  
なくとも(正三位家隆)

おとにきく松がうらしまけふぞ見るむべも心あるあまはすみけり  
(素性法師)

心あるあまのもしほ木たきすてて月にぞあかすまつがうらしま  
(祝部成茂)

わかるれどあひもおもはぬもしきを見ざらん事やなにかかなしき  
(伊勢)

あすよりのなごりをなにかこたましあひもおもはぬあきのわ  
かれち(入道前太政大臣)

拾 遺 集

わが宿の梅の立枝やみえつらむ思ひのほかに君がきませる(平兼  
盛)

やどからぞむめのたちえもとはれけるあるじもしらずなには  
ふらん(源信定)

花もみな散りぬる宿はゆく春のふる里とこそなりぬべらなれ(紀貫  
之)

ちる花のふるきとこそなりにけれわがすむやどのはるのくれ  
がた(前大僧正慈円)

逢坂の関のいはかどふみならし山たち出づるきりはらの駒(藤原高

遠)

あふさかのせきふみならずかちびとのわたれどぬれぬはなのし  
らなみ(後京極摂政前太政大臣)

神なびのみむろの山を今日みれば下草かけて色づきにけり(曾禰好  
忠)

みむろやましたくさかけておくつゆにこのまの月のかげぞうつ  
ろふ(左近中将伊平)

唐錦枝にひとむらのこれるは秋のかたみをたたぬなりけり(僧正遍  
昭)

からにしきむらむらのこるもみぢばや秋のかたみのこるもなる  
らん(前中納言匡房)

のこしおくあきのかたみのからにしまちはてつるはこがらし  
のかぜ(権大納言宗家)

蘆の葉に隠れて住みし津の国のこやもあらはに冬はきにけり(源重  
之)

しもがれはあらはに見えしあしのやのこやのへだてはかすみな  
りけり(待賢門院堀河)

紫の色にはさくなむさし野のくさのゆかりと人もこそ見れ(如覚法  
師)

むさしのはるのけしきもしられけりかきねにめぐむくさのゆ  
かりに(前大僧正慈円)

有明の月のひかりをまつ程にわが世のいたくふけにけるかな(藤原  
仲文)

身をあきのわがよやいたくふけぬらん月をのみやはまつとなけ  
れど (参議雅経)

忘るなよほどは雲居になりぬとも空行く月のめぐりあふまで (橘忠  
幹)

わすれじのちぎりをたのむわかれかなそらゆく月のすゑをかぞ  
へて (後京極摂政前太政大臣)

はるかなるほどはくもるの月日のみおもはぬかたにゆきめぐり  
つつ (従三位範兼)

わが事はえもいはしるの結び松千年をふとも誰か解くべき (曾禰好  
忠)

としふれど猶いはしるのむすびまつとけぬものゆゑ人もこそし  
れ (左京大夫頼輔)

名のみして山は三笠もなかりけり朝日夕日のさすをいふかも (紀貫  
之)

しぐれにはぬれぬこのはなかりけりやまはみかさの名のみふ  
りつつ (正三位知家)

ぬす人の立田の山に入りけり同じかざしの名にやけがれむ (藤原  
為頼)

こえじただおなじかざしの名もつらしたつたのやまの夜半のし  
らなみ (法眼宗円)

ますかがみそなる影にむかひて見る時にこそしらぬ翁にあふ心  
地すれ (読人しらす)

のちの世をてらすかがみのかげを見よしぬおきなはあふかひ

もなし (蓮生法師)

恋すてふわが名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか (壬  
生忠見)

ひとしれずしのぶのうらにやくしほのわがなはまだきたつけぶ  
りかな (正三位家隆)

いかにしてしばし忘れむ命だにあらばあふ夜のありもこそすれ (読  
人しらす)

こひしなぬ身のおこたりぞとしへぬるあらばあふのこころづ  
よきに (権中納言定家)

恋ひ死なむ後はなにせむ生ける日の為こそ人の見まくほしけれ (大  
伴百世)

かれはてのちはなにせんあさぢふに秋こそ人をまつむしのこ  
ゑ (藤原教雅)

忍ぶれば苦しかりけりしの薄秋のさかりになりやしなまし (勝観法  
師)

ひとめもるわがかよひぢのしのすすきいつとかまたんあきのさ  
かりを (正三位知家)

ひたぶるに死なば何かはさもあらばあれ生きてかひなき物思ふ身は  
(読人しらす)

こひしなむのちのうき世はしらねどもいきてかひなきものはお  
もはじ (藤原隆信)

のちの世をてらすかがみのかげを見よしらぬおきなほあふかひ

後拾遺集

御田屋守けふはさ月になりにつけりいそげや早苗おいもこそすれ(曾禰好忠)

み田やもりいそぐさなへにおなじくはちよのかずとれわがきみのため(内大臣)

あらざらむこの世のほかのおもひでにいまひとたびの逢ふ事もがな(和泉式部)

如何せんいまひとたびのあふことをゆめにだに見てねぎめずも哉(殷富門院大輔)

なほざりのそらだのめせであはれにもまつにかならずいづる月かな(小弁)

あだびとをまつよふけゆくやまのはにそらだのめせぬありあけの月(嘉陽門院越前)

金葉集

もろともに昔の下には朽ちずしてうづもれぬ名をみるぞかなしき(和泉式部)

こけのしたにくちせぬ名こそかなしけれとまればそれをもしむならひに(法眼宗円)

わがふかくこけのしたまでおもひおくうづもれぬ名はきみやのこさん(尊円法師)

もろびとのうづもれぬ名をうれしとやこけのしたにもけふは見らむ(前大僧正慈円)

詞花集

むねはふじ袖は清見が関なれや烟も波もたたぬ日ぞなき(平祐季)

いはぬまはこころひとつにさわがれてけぶりもなみもむねにこそたて(宜秋門院丹後)

そでのなみむねのけぶりはたれも見よきみがうき名のたつぞかなしき(後京極摂政前太政大臣)

新古今集

かささぎの渡せるはしに置く霜のしろきをみれば夜ぞ更けにける(大伴家持)

かささぎのわたすやいづこゆふしものくもろにしろきみねのかけはし(正三位家隆)

東路のみちのはてなる常陸帯のかごとばかりもあはんとぞおもふ(詠人しらず)

こえばやなあづまちときくひたちおびのかごとばかりのあふさかのせき(郁芳門院安芸)

忘れじの行末ではかたければ今日をかぎりの命ともがな(儀同三司母)

わすれじのゆくすゑかたきよの中にむそぢなれぬるそでの月かげ(源家長)

あまのとをおし明けがたの月みればうき人しもぞ恋しかりける(詠人しらず)



いけにすむをしあげがたのそらの月そでのこほりになくなくぞ  
見る (正三位家隆)

朝倉やきのまろどのにわがをればなのをしつづ行くはたがこそ  
(天智天皇)

さ夜ふかみやまほとときすなのりしてきのまろどのをいまぞす  
ぐなる (右兵衛督公行)

しら浪のよするなぎさによをつくすあまのこなれば宿もさだめず  
(誑人しらず)

さとのあまのさだめぬやどうづもれぬよするなぎさのゆきの  
しらなみ (八条院高倉)

河社しのにをりはへほすころもいかにほせばかなぬかひざらん (紀  
貫之)

けふよりはなみにをりはへなつごろもほすやかきねのたまがは  
のさと (前関白)

古今和歌六帖

時しまれ秋やは人に別るべきさは夜寒になれる頃しも (壬生忠  
岑)

ひとりねの夜さむになれる月みれば時しもあれやころもうつな  
り (後京極摂政前太政大臣)

伊勢物語

あらたまの年の三とせを待ちわびてただこよひこそにひまくらすれ

『続古今集』恋四 誑人しらず

まちわびてみとせもすぐるとこのうへに猶かはらぬはなみだな  
りけり (入道前太政大臣)

いにしへのしづのをだまき繰りかへし昔を今になすよしもがな  
くりかへししづのをだまきいくたびもとほきむかしをこひぬひ  
ぞなき (御製)

こもり江に思ふ心をいかでかは舟さす棹のさして知るべき (『続後  
撰集』恋一 誑人しらず)

しらせばやおもひいりえのたまがしはふねきすさほのしたにこ  
がると (源家長)

恋ひわびぬあまの刈る藻にやどるてふ我から身をもくだきつるかな  
(『新勅撰集』恋一 誑人しらず)

ほしわびぬあまのかるもにしはたれてわれからぬるそでのう  
らなみ (侍従具定母)

かち人の渡れど濡れぬえにしあれば  
又あふ坂の関はこえなむ

あふさかのせきふみならずかちびとのわたれどぬれぬはなのし  
らなみ (後京極摂政前太政大臣)

袖ぬれてあまの刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやす  
る (『新勅撰集』恋一 在原業平)

あまのかるみるをあふにてありしだにいまはなぎさによせぬな  
み哉 (前大納言隆房)

秋かけていひしながらもあらなくに木の葉ふりしくえにこそありけ

れ『新勅撰集』恋二 読人しらす

ひとごろこの葉ふりしくえにしあればなみだのかはもいろかはりけり（按察使兼宗）

咲く花のしたにかくる人を多みありしにまさる藤のかげかも

（『玉葉集』賀 在原業平）

はるひさくふちのしたかげいろみえてありしにまさるやどのいけみづ（正三位知家）

源氏物語

うしとのみひとへに物は思ほえてひだりみぎにもぬる袖かな（須磨）

うしとおもふものからぬるそでのうらひだりみぎにもなみやたつらん（前関白）

しなてるや鳩のみづうみに漕ぐ舟のまほならねども逢ひ見しものを（早蕨）

にほのうみやかすみのをちにこぐふねのまほにもはるのけしきなるかな（式子内親王）

和漢朗詠集

うれしさを昔は袖につつみけりこよひは身にもあまりぬるかな（説人しらす）

うれしさもつつみなれにしそでに又ははあまりの身をぞうらむる（参議雅経）

催馬楽

沢田川 袖漬くばかり や 浅けれど はれ 浅けれど 恭仁の宮  
人や 高橋わたす

あはれ そこよしや 高橋わたす（沢田川）

さみだれのころもへぬればさはだ河そでつくばかりあさきせもなし（左近中将公衡）

席田の 席田の 伊津貫川に や 住む鶴の 住む鶴の や  
住む鶴の 千歳を予ねてぞ 遊びあへる 千歳を予ねてぞ 遊びあへる（席田）

むしろだにむれるるたづの千世もみなきみがよはひにしかじとぞおもふ（大宰大夫式重家）

かずならぬかかるみくづはむしろだのつるのよはひもなにかいのらん（二条太皇太后宮大式）